

〔表14 各学級の「めあて」「活動」「振り返り」の手立て〕

「めあて」＜学習の意味づけ＞					
児童生徒が授業全体への見通しをもち、めあてを意識できるような、学習集団や一人一人に応じた手立て					
小学部 B組	・単元スケジュールの提示 ・「誰かに〇〇する」ような単元を仕組む ・相手を意識できる手立て ・写真を活用した前時の学習の振り返り	中学部 3年	・めあて記入のための実態に応じたワークシートの準備 ・めあての例文提示 ・前時の学習を振り返る時間の設定	高等部 1年	・前時のワークシートの確認 ・めあてを自分で設定 ・めあての例文提示 ・見通しがもちやすいような視覚支援
「活動」＜方向づけ＞					
核となる活動に対して、試行錯誤するなど児童の「思考、判断、表現」を促す手立て					
小学部 B組	・自分の役割が意識できるような手立て ・じっくり取り組めるような時間の確保 ・制作においては、アイデアが膨らむような材料や道具の準備 ・教師の手本の提示、友達をモデルとできるような手立て ・試したり、やり直したりする時間の確保	中学部 3年	・試行錯誤する時間の確保 ・生徒の考えを言語化したり、具体化したり、先に進めるようなヒントを出したりする ・個別の働き掛け ・肯定的な言葉かけ ・ICT機器の活用 ・話し合い活動	高等部 1年	・興味・関心を取り入れる ・ICT機器の活用 ・生徒が表出した考えを肯定的に受け止め、さらに考えを深めたり広げたりするように働きかける。 ・自己選択 ・話し合いでの合意形成
「振り返り」＜価値づけ＞					
授業の授業内容の想起に加え、次の授業への意欲を喚起するような振り返りの活動ができるような手立て					
小学部 B組	・めあてや活動内容を視覚的に示して確認 ・児童が発表する場面の設定 ・頑張った姿の共有や賞賛 ・次時につながる発問や問いかけの準備	中学部 3年	・実態に応じた振り返り表やワークシート ・次時への意欲を喚起する発問 ・頑張った姿の共有や賞賛	高等部 1年	・自分で設定しためあての確認 ・実態に応じた振り返り表やワークシートの使用

表のような手立てを意識しながら授業実践を積み、研究授業検討会での助言等も踏まえ、本研究グループでは以下のようなことについて検討した。

- ・知的障害のある児童生徒は、表出の少なさから「思考していない」と捉えられがちだが、本来は内言語としてもっているものが多く、実際はいろいろな形で表出している。些細な表出を見逃さず読み取り、さらに引き出すような支援が大切である。
- ・児童生徒の生き生きとした姿を引き出す手立ての分析のためには、まず「生き生きとした姿」を児童生徒のどのような発言、表情から見取るのか明確にすることが大切である。授業前に評価規準等として想定しておくことも有効だが、授業を教師も振り返り、普段よりも良い児童生徒のリアクションを見出し、その姿を引き出すことになった指導・支援の工夫のポイントを見逃さないようにしなければならない。有効だった指導・支援を教師間で共有することも求められる。
- ・授業内に自己選択する場面を設定することが大切である。自分で選べることは、児童生徒の意欲を喚起し、やりがいや楽しみをもって活動することにつながる。
- ・実態に幅のある集団において、どの児童生徒も見通しをもてるように、分かりやすい提示をしていくには、ICT機器を用いた視覚支援に加えて、T1は全体説明しT2は個別の補足やモデルを示すなどのチームティーチングにおける連携などの方法も考えられる。
- ・1授業内の「めあて」－「活動」－「振り返り」のサイクルのみならず、「めあてを立てる→行動する→評価する→また次のめあてにつながる」という単元内でのサイクルを仕組むことで、①経験が生かされ活動や授業内容が分かりやすくなる。②振り返りから次時への見通しや期待につながり、それが次時のめあてになる。③見通しがもてるようになることや経験を生かせることから、児童生徒の試行錯誤する姿やさらに工夫する姿を引き出すことができ、結果として課題解決することにつながる。
- ・児童生徒がめあてを自分事として捉えるためには、学習活動が児童生徒の興味・関心に基づいたり、「楽しい」と感じられたりすることがまずは大切である。また、活動の目的をもたせる意味でも、他者意識を育み他者との関わりを仕組むことが大切である。自分がやっていることが誰かの役に立っているという経験は、児童生徒が卒業後に地域で生活していく上でも役立つ資質・能力となる。
- ・児童生徒がめあてを自分事として捉えるには、自分の行動のポジティブな結果のフィードバックが必要である。学習活動そのものは、児童生徒にとってメリットと感ずることばかりではないと思われる。そのため「振り返り」が重要となり、教師の賞賛などが児童生徒に「よかったこと」「うれしいこと」として伝わることが求められる。

本研究では研究授業等を通して、児童生徒の試行錯誤する姿や考える姿などめあてにむかって工夫する姿を引き出すことができた。しかし、興味・関心を授業作りの中心にすれば児童生徒の思考する姿を引き出しやすいが、指導要領の内容を系統的・効率的に習得するような単元計画や授業展開とならない場合もある。このことについては今後も検討を深めていかなければならない。

（４）第３グループの研究の取組

第３研究グループは、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】そのものではなく、【「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力】を基とした「イメージを広げて表現する児童生徒の育成」というテーマでグループ研究を進めた。本グループは小学部Ａ組（１・２年生）、中学部２年生、高等部３年生で構成した。生活を切り拓く「思考力、判断力、表現力」とはどのようなものか検討する中で、与えられた課題を解決するような、閉じた「思考力、判断力、表現力」だけでなく、生活を楽しむよりよいものにしていくために、自分のイメージを広げて創意工夫する力が必要であるとの意見が上がった。

まず、どのような授業作りをすれば、このテーマに迫ることができるのか検討したところ、「興味・関心」「好きなこと」「得意なこと」に着目し、授業作りに取り込んでいくことで、主体的な活動を引き出すことができ、イメージを広げて表現する児童生徒を育成することにつながるのではないかと考えた。授業においては、好きなことを学習活動に取り入れて設定することにより、児童生徒は活動に没頭したり創意工夫したりして取り組み、結果として周囲に認められたり褒められたりして達成感を味わうことができると考える。このプラスの結果や評価から、より学習活動への意欲が生まれ、好きな活動はもちろんだが、他の活動についてもチャレンジしたり創意工夫しながら表現したりする児童生徒の姿を引き出すことができると仮説を設定した。

また、特別支援学校学習指導要領の解説自立活動編では、「児童又は生徒が興味をもって主体的に取り組み、成就感を味わうとともに自己を肯定的にとらえることができる指導内容を取り入れること」「個々の児童又は生徒の発達の進んでいる側面をさらに伸ばすことによって、遅れている側面を補うことができるような指導内容も取り上げること」と記載されているように、児童生徒の発達を支援する意味でも、「興味・関心」「好きなこと」「得意なこと」を授業に取り入れることが重要であると捉えられた。

以上のことから、「イメージを広げて表現する児童生徒の育成」に「～好きなことから始めてみよう～」とサブテーマを加えることとした。

具体的に研究を進めていくにあたって、まず、児童生徒の「好きなこと」を的確に把握したいと考えた。佐賀県内で様式を統一された個別の教育支援計画には、児童生徒の好きなこと

〔表15 個別の教育支援計画から抜き出した好きなもの・好きなこと〕

名前	好きなこと	赤	青	緑	黄
		体を動かす	絵・塗り絵	ダンス、歌、音楽、YouTube	本
	・慣れた人との関わり ・お絵かき、色塗り、言語、読書 ・プランコ？ ・NHK教育の番組 ・プリキュア		○	○	○
	・テレビを見て笑うこと ・スマートフォンでゲームをすること ・読書？ ・歌を歌う？ ・鉛筆を用いて立体感を表現して描くことが上手		○	○	○
	・家族、友達、先生、飼っている動物など、周囲との関わり ・縄跳び ・ダンス ・歌うこと ・ままごと ・水遊び ・歌番組を見ること ・サガン鳥栖	○		○	
	・神話に出てくる場所（神社や洞窟など） ・小旅行で神社や洞窟を見に行くこと ・戦闘に関わるものや歴史 ・鉛筆を用いて立体感を表現して描くことが上手 ・将棋		○		
	・お絵かき、色塗り、パズル、折り紙、歌うこと、ダンス ・肌触りのよい布団？ ・文字や絵を写すこと ・ゲーム ・動画視聴		○	○	
	・慣れた人やもの ・トランプ、サッカー、かくれんぼ ・身の回りの整理整頓 ・アニメ（鬼滅の刃）のキャラクター、テレビに出ている芸能人 ・小物を作ること ・歌を聴くこと、本を読むこと、絵をかくこと、テレビを観ること	○	○	○	○
	・絵を描くことや色塗り ・料理を作ること ・プランコ ・なめこ、妖怪ウォッチ、セサミストリート、ちびまる子ちゃんなどのキャラクター ・車のエンブレムやプリキュア、動物など、好きなものや好きなことの名前を覚えること	○	○		

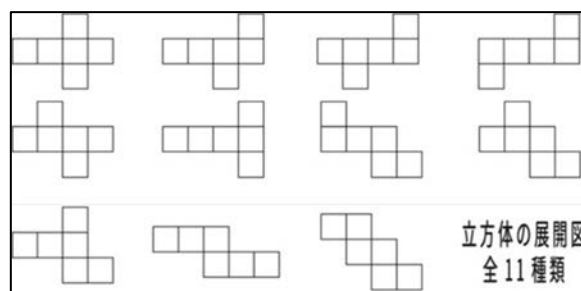
を記載する欄がある。それをクラスの児童生徒の分を抜き出して、傾向を見い出すこととした（表 15）。「運動や外遊び」「絵を描くことや塗り絵など美術的な内容」「音楽関係」「読書等」に分類をしたところ、小学部段階では絵を描いたり音楽を聴いたりするなど、一人で楽しむ活動や受動的な活動が多く、中学部や高等部段階になると、体を動かしたり、友達と関わったりする活動が増えることが分かった。成長に伴い好きなことが変化していくことが明らかになった。また、書き出しを行う中で、言語などによる表出の少ない児童生徒については、児童生徒の好きなことや得意なことを十分に教師が捉えることができていないのではないかと考えられた。さらに、指導内容とも関連させながら、「好きなこと」を取り入れていくには、児童生徒の「好きなこと」をさらに見付けていたり、「好きなこと」自体が広がったり、深まったりすることも大切ではないかと検討した。

次に、児童生徒の「好きなこと」を、どのように授業作りに取り入れ、どのように生かしていくのかについて研究授業を通して検討することとした。ここからは、中学部の数学科と、小学部A組（1・2年生）の生活単元学習における実践について紹介する。

●中学部数学Aグループ 数学科「『いろいろな形』（第1次）」の取組の紹介

本校中学部では、習得度別に3つのグループを編成して数学科の授業を行っており、生徒の教育的ニーズも鑑みながら、教科内容を幅広く系統的に取り扱うことができるように年間指導計画を作成して、各単元を設定している。数学Aグループには主に特別支援学校学習指導要領知的障害各教科の中学部1段階から2段階の内容を学ぶ生徒が属している。図形を取り扱う本単元を設定していたが、第1次として「立体図形の展開図」を取り扱うこととした。学習指導要領では、立体図形の展開図の取扱いは高等部1段階となっている。しかし、日頃からブロックを使って遊ぶなど立体的な物を組み立てることが好きな様子が見られること、小学校で立体図形について学んだ経験のある生徒が多いことなどから、生徒にとって興味・関心の高い学習であるため、本単元の導入として取り入れることとした。「立体図形の展開図」の学習に取り組むことが、第2次移行の学習への意欲につながり、図形に関する資質・能力を育成する一助となると考えた。また、「立体図形の展開図」の学習内においても、生徒がじっくり考えたり、友達と考えを出し合ったりしながら、イメージを広げて表現する姿を引き出すことができるのではないかと考えた。

本時の目標は「一人で考えたり友達と協力したりしながら、立方体になる展開図を複数個見付けることができる」とし、11種類ある立方体の展開図（図 25）を探すという活動に取り組んだ。まず、前時に立体図形への興味を喚起するためにゲームキャラクターを立方体で示した後、一人一人に立方体



〔図25 立方体の展開図〕

を用意し、立方体を展開させたり、組み上げたりして、立体図形と展開図（平面）の関係を実感できるようにした。

本時では、立方体の展開図の様々なパターンを考え出しやすいように、正方形のカードとカード同士を貼り合わせることができるよう一人一人にセロハンテープを用意した。ねらいどおり、試行錯誤しながら思考する生徒の姿が見られた（図 26）。ある生徒は正方形のカードをまず並べて展開図を作り、それをイメージ上で組み立て、立方体になりそうだと判断してから、テープで貼り合わせていた。



〔図26 正方形の厚紙とセロハンテープを使って操作しながら考える様子〕

また、別の生徒は、正方形のカードを貼り合わせ1面増やすごとに組み立ててみて、立方体に近づくかどうか確かめてから、再び展開して次の面を貼り合わせるという行程を踏みながら考えていた。

作った展開図は前のホワイトボードに貼り、他の人が出したものと合同か異なるかを重ねて確認できるようにした（図 27）。授業展開では、友達と協力して考える時間も設定し、教え合いながら一緒に考える生徒もいたが、一人で集中して展開図を見つけ出そうとそのまま取組を続ける生徒が多かった。



〔図27 同じものを作ったかどうか重ねて確かめる様子〕

1時間の授業内で 11 種類全ての展開図をグループとして見つけることができた。生徒は口々に「できた」「わかった」と発言しており、達成感をもった様子が見られた。また、展開図から立方体を作成することに面白さを感じ、休み時間にも作成して楽しむ生徒がいた。

今回、生徒が思考するにあたって、操作できる具体物（正方形のカード）が手元にあることが、生徒の思考を促す手立てとして有効であることが分かった。また、具体物を操作する様子から、生徒によって思考のプロセスが異なるということを教師側が見取ることができ、目には見えない生徒の内面の動きを捉え、評価することができたという点からも、具体物を準備し、生徒がそれを操作しながら思考できるようにしたことは有効だった。

しかし、見つけた展開図を全体で共有する形態にしたことで、「自分で見つけた展開図のアイデアだが、もうすでに他の人が見付けている」という状況があった点は、一部の生徒にとっては意欲を下げることになった。生徒が達成感を味わうことができるようにするために、全体共有をする方法やタイミングを工夫する必要がある。また、生徒が一人で考えることに集中し、教師が想定した友達との交流を通した学習が少なかった。一人で考える時間を十分に取った上で、個別学習からペア学習へ、さらにみんなで話し合う活動へ発展させるなど、学び合いの場の有効な設定の仕方を考えていくことなどが課題となった。

●小学部A組 生活単元学習「A組なつまつりをしよう！！」の取組の紹介

小学部A組では児童の好きなことから単元の計画を始め、児童にとって魅力的な授業作りをすることを目指し、まず表15で示した「個別の指導計画から抜き出した児童生徒の好きなもの・好きなこと」を確認した。これまでの学校生活から児童の好きなものの広がりを感じられたことや、本単元の学習内容と関わりの深い事柄について



〔図28 選択カードを用いた好きなこと把握の様子〕

での興味・関心をもっと深く探るべきではないかと考え、選択カードを準備して一人一人に好きなものを聞き取り（図28）、「好きなものリスト」の整理を行った。

単元の計画に向けた準備として、まず、本学級の児童が夏祭りの活動に見通しをもつことができるように、単元前に小学部B組（3・4年生）及びC組（5・6年生）の夏祭りの生活単元学習に参加した。本学級の児童は、お客として参加して夏祭りの楽しさを味わい、自分達も楽しい夏祭りにしたいという気持ちが芽生えた様子だった。そこで、A組の夏祭りを「にこにこA組なつまつり」とし、自分達もお客さんも「にこにこになる夏祭り」を実施する単元に取り組むこととした。

活動内容を設定にあたっては、児童の興味・関心に基づくものとするため、児童と話し合っ



〔図29 夏祭りの活動を選ぶ様子〕

ていくこととした。児童の好きなことを生かす活動として「ぼんおどり」「おみこし」「おみせやさん」「かざり（作り）」を提示し、取り組みたい活動に児童が自分の写真を貼る活動をした（図29）。ほとんどの児童が、どの活動にも貼っていた。「おみせやさん」としては、「わにわにぱにつく」と「ぼーりんぐ」に決まった。

かざり作りの活動では、好きなキャラクターの塗り絵を塗って提灯の型に貼り付けて飾りを作るようにしたところ、ほとんどの児童が意欲的に活動に取り組んでいた。絵本をもってきて本物そっくりに塗ろうとする児童や、休み時間や家に持って帰って取り組む児童もいた。「A組なつまつり」の単元期間中は教室をその提灯で飾っておくようにしたところ、他クラスの教師を連れてきて、自分や友達の作った飾りを紹介する姿が見られた。

おみこし作りの活動では、ほとんどの児童が好きな機関車のキャラクターをモチーフに作成した。機関車からイメージを膨らませ、煙突から出る煙を作る児童がいた。「おみせやさん」では、お互いのチームがお店屋さんとお客さんになって交互に練習し合った。「おみせやさん」の練習に繰り返し取り組む



〔図30 工夫してワニを出す様子〕

ちに、自分だけでなく、友達の役割にも意識を向けることができるようになってきたことから、友達の手伝いを自分からするようになった児童もいた。「おみせやさん」の1つの「わにわにぱにつく」のお店では、お客さんの様子をよく見て、お客さんに合わせてワニを出すスピードやタイミングを工夫する姿も見られた（図 30）。

お客さんを招いてのお祭り本番の後は、教室に戻って振り返りを行った。活動の様子の画像をタブレット端末で見ながら、児童の頑張りを一人一人確認した。また、お客さんの表情も画像で写し出し、「にこにこになっていたかな」と児童と一緒に確認するようにしたところ、みんなタブレット端末の前に寄ってきて、お客さんの笑顔を確認し、うれしそうにしていた。「自分達が楽しかった」という満足感に加えて「お客さんを喜ばすことができた」という達成感を味わうことができたと考えた。

本研究授業では、まず、児童の「好きなこと」を把握し直しを行った。普段の様子を見る中で、把握することはできていたものの、今回はカードを準備して調査した。その結果、教師が把握していなかった「好きなもの」を新たに発見することができ、装飾のモチーフにするなどの活用につなげることができた。児童の興味・関心を取り入れた授業作りを行ったことが、児童が意欲をもって主体的に活動することにつながったと考える。また、児童が考えて選択したり話し合ったりして、取り組む内容や方法を決めていくようにしたこと、授業作りを行う上で重要であったと考える。自分達で選択した学習活動に意欲的に活動に取り組むことができることは予測できたことだが、加えて、教材や教師の指示に注意を向け続けることができたため、取り組むべきことが分かり、見通しをもって自分から活動し始める姿が見られた。

このように、児童主体で活動内容を設定することは、単元前の授業準備が難しくなるため、すべての単元で取り入れることは難しいが、児童主体で活動内容を決定していくような単元を、年間を通して計画的に実施していくことが重要であると考えた。

夏祭りは、お客さんに喜んでもらうことをめあてとして示した。「相手のために、誰かのために頑張る」という思いをもてるようにすることも、児童が主体的に活動する手立てとして重要であることが分かった。

以上のような取り組みを通して、第3グループの「好きなことだからこそ意欲的に工夫して取り組める。それを褒められ、認められることで、さらに意欲が高まり、自分なりに工夫したり、表現したり、チャレンジしたりできる児童生徒になっていくだろう」の仮説は、以下の点で立証されたと捉えた。

- ・活動において「自分から」「よい表情・真剣な表情」「最後まで」「活発に」取り組む児童生徒の様子が見られた。
- ・教材・教具、教師の指示や説明に意識を向けることができていたため、見通しをもって取り組み始める児童生徒が多かった。

- ・「○○のようにしたい」「○○の材料がほしい」など、自分の好きなものを深めるためにアイデアを出す姿が見られた。また、うまくいかなくても諦めずに、方法を少しずつ変えながら試行錯誤して取り組む姿が見られた。
- ・一人で集中している場面もあったが、友達の様子にも注意が向けられてアイデアを共有したり、協力したりして活動に取り組む場面もあった。
また、好きなことを取り入れた活動において、児童生徒がイメージを広げて表現するために必要な教師の支援の在り方についても、いくつか明らかにすることができたと考える。
- ・「授業はこうするべき」という固定観念にとらわれず、積極的に児童生徒の興味・関心を活動内容に取り入れ、指導内容との関連を積極的に見出すことが大切である。
- ・児童生徒の「好きなこと」は変化していくものであり、教師は分かっているつもりにならずに、その都度丁寧に児童生徒の興味・関心を把握していかななくてはならない。
- ・児童生徒の思いやアイデアを受け止めて、実現方法を一緒に考え、達成に向けて支援していくことが必要である。児童生徒がイメージを広げて様々なアイデアを出してくることを授業前に予測し、十分な教材・教具を準備し、児童生徒が試行錯誤しながら達成に向けて取り組むことができるような時間を確保することも求められる。
- ・目には見えない児童生徒のイメージや思いを、見える化したり、教師が読み取ったりするための手立てが必要である。児童生徒が操作しやすく、思考が見える教材・教具や授業展開の工夫に加え、動画撮影してじっくり児童生徒の行動や表情を分析するなどの工夫が必要であると考えた。

本研究グループの目的は「イメージを広げて表現する児童生徒の育成」であり、「好きなことから始める」ことは目的達成の手段であるが、児童生徒が「自分の好きなことや得意なこと」を深めたり・広げたりすること自体も、児童生徒が現在及び将来の生活を切り拓くための大切な力となることも意識しながら、今後も指導・支援に取り組んでいきたい。